



菅江真澄遊覧記を楽しむ

小笹 鉄文

(菅江真澄研究会 会長)

○ 菅江真澄は江戸時代後期に故郷の三河国から北日本を旅し、秋田で死去した文人です。旅日記は真澄遊覧記と呼ばれてきました。平成3（1991）年に「菅江真澄遊覧記」の名称で国の重要文化財に指定されました。旅の生涯を追うとともに、雪や動植物などの観察や民俗・生業について記述した真澄の業績を紹介します。菅江真澄遊覧記を楽しんでいただけたら幸いです。

1 はじめに

『真澄遊覧記を読む』という柳田国男の著作があります。昭和3（1928）年の作です。その中に「いつの頃からか、菅江真澄の旅日記が真澄遊覧記と呼ばれてきた」とあります。『雪国の春』という本に収められています。

菅江真澄は文政5（1822）年に藩校明德館へ旅日記を献納しました。死後に追加された著作を含め、89冊が平成3（1991）年に国の重要文化財に指定されました。「菅江真澄遊覧記」は文化財の名称になったのです。

菅江真澄は秋田では知られていますが、全国的にはまだ知名度は高くありません。学問的には、日本民俗学の先駆者として評価されています。民俗学は人々の生活や風俗などを研究する学問ですが、当時はまだ学問とは認識されていませんでした。近代日本民俗学の創始者である柳田国男が菅江真澄を再発見したのでした。菅江真澄は北日本を旅し、地方の生活風俗、行事を文章と図絵で記録しました。

なお、掲載した図絵は「秋田県立博物館蔵写本」です。

2 菅江真澄の生涯

○生い立ち

「菅江真澄」というのは秋田に住むようになってから名乗った名前です。本名は白井英二、後に秀雄と称しました。生まれは三河国、今の愛知県東部です。真澄は自分の生年月日を明かしませんでした。通説では、宝暦4（1754）年生まれとされています。ところが、近年明らかになった津軽藩の記録によれば、通説よりも5年ほど後の生まれでないと推定されます（菊池勇夫『北の歴史から』第4号2021年）。墓碑に76、7歳で逝去したと刻んでいますが、71歳で死去したのかも知れません。

子どもの頃に吉田城下（豊橋市）、後に岡崎、そして尾張名古屋で学びました。真澄は穏やかな性格で、偏見無く人付き合いし、歓談することを楽しんだ人でした。

○旅のはじめ

それでは、「菅江真澄遊覧記」の旅へ踏み出しましょう。スタートは故郷の三河国です。最初の旅日記『伊那の中路』の冒頭に、「この日本国内のすべての古い神社を拝み巡って、幣を奉り

たいと、天明3年、のどかな春2月の末、父母に別れ、故郷を後にして旅立った」とあります。西暦1783年のことです。信濃国の飯田を経て、本洗馬（現在の長野県塩尻市）の釜井庵におよそ1年滞在します。釜井庵は現存し、隣接して塩尻市の歴史資料館があり、真澄に関する資料が展示されています。真澄は姨捨山で月見をしたり、犀川に架かる久米路の橋を訪れたりしました。また、北アルプスにある有明山が月の光に照らされている情景を書いています。有明山は富士山形の山で歌枕として有名でした。私は百名山の燕岳に登る途中に有明山の裾を通り、真澄のことを思いました。

○最初の秋田

真澄は越後、庄内を駆け足で通過し、象潟を訪れました。地震で隆起する前の象潟を舟で巡りました。本荘から東へ行き、雪の峠を越えて西馬音内に入りました。湯沢で年を越して、雪国の様子を図絵と日記に記録しました。

春になって、小野小町の里と院内銀山を見てから北上し、阿仁を経て久保田城下に入りました。俳人の吉川五明の住所録に「尾張駿河町 白井英二 医也」と記されています。そして、男鹿を見物して、津軽へ向かいました。

○津軽から南部、仙台へ

青森の善知鳥神社で、『海を渡るのは3年待て』との託宣があり、南部、仙台へと南下しました。盛岡では北上川の船橋を記録しました。岩手山を背景に多数の小舟の上に板を渡して橋にした様子を図絵に描きました。平泉では中尊寺、毛越寺を参拝し、松島そして多賀城についても記しています。さらに、気仙沼まで訪れました。

○松前、蝦夷地の旅

3年後の天明8(1788)年夏に津軽半島から海峡を渡り、松前に着きました。和歌の実力を認められ、藩の中樞の人々と交わり、城下町に

滞在しました。翌寛政元(1789)年、西海岸の江差を経て霊場の太田山に登りました。私は江差までJRに乗って(現在は廃線)、バスを乗り継いで当時の大成町役場まで行き、徒歩で太田山まで行きました。太田山は急坂で這いつくばって登った思い出があります。また、真澄は函館方面に行き、昆布刈りについて図絵で克明に記録しました。

寛政4(1792)年には、東海岸を北上し、アイヌが住む地域を通して有珠山に登山しました。傑作とされる日記『えぞのてぶり』です。描いた図絵は「有珠山遠望」で鳥瞰図です。有珠山の頂上に人がいます。その中に真澄自身もいます。左の山は羊蹄山、湖は洞爺湖です。まるでドローンを飛ばして撮影したような絵です。

海岸の有珠の村に有珠善光寺があり、ここに松前藩の最北の役所がありました。私はJRに乗って有珠駅で下車しました。風光明媚な入り江に面した漁村で、真澄が描いた風景が残っていました。どこか気持ちが安らぐ穏やかなところでした。



(有珠山遠望)

○下北、津軽

真澄は、寛政4(1792)年10月、津軽海峡を渡り、下北半島の大間に着きました。真澄が描いた『大間の浦』の牧に私も行ってみました。現在も牧場が残っており、馬ではなく、牛が放牧されていましたが、風景は昔とあまり変わっていないように思いました。

真澄が描いたこの絵は、美術史家で平成28(2016)年度文化功労者の辻惟雄(つじ のぶお)氏が次のように高く評価しています。「牧場の柵が遊園地のレールのようにカーブしていて、その波のよううねりが跳ねる馬の動きに呼応する。真澄自身の解放された心の動きもまたそこに託されている」(『菅江真澄民俗図絵』下巻 1987年 岩崎美術社)。



(大間の浦)

2年半の間、半島を巡り、恐山や仏ヶ浦など図絵を入れた日記で記録しました。

そして津軽領に入り、6年半を過ごすことになります。寛政8(1796)年4月に縄文土器を今の三内丸山遺跡で記録したことが特筆されます。弘前市周辺に滞在し、津軽半島西海岸の十三湖などを巡り、岩木山に登りました。また、

白神山地へ入り、暗門の滝を写生し、泊まった小屋で秋田から山越えて来たきこりと出会っています。

○再び秋田へ

享和元(1801)年、滞在していた深浦を多くの人に見送られて秋田へ向かいました。その途中、ハタハタ漁を見ました。

師走に久保田城下へ16年ぶりに訪れました。その後亡くなるまでの28年間を秋田で過ごしました。

最初の6年間は、秋田の北部を中心に旅し、白神山地や森吉山に登り、白糸の滝、大柄の滝、笛滝、十和田湖などを巡ったほか、太良鉱山、大葛金山、阿仁銅山を訪ねました。

十和田湖は巨大噴火のエネルギーを秘めた火山です。この美しい湖が平安時代に東北地方最大の破局的な噴火をしたことは、あまり知られていません。火砕流がカルデラ壁を越えて、大湯川、さらに米代川に流下しました。鷹巣地域には埋もれた平安時代の家屋が発見され、真澄は埋没家屋の絵をスケッチしました。この時の噴火の記憶は、八郎太郎と難蔵法師の争いの伝説として残されています。真澄はその伝説を詳しく書き留めました。私は今から25年前に十和田湖ビジターセンターに行った時、展示コーナーに「最初に十和田湖を紹介したのは菅江真澄である」と書かれていて、感激したことを覚えています。

「十曲湖」の絵について、辻惟雄氏は「秋田には江戸時代洋風画の草分けである秋田蘭画の伝統があった。真澄の絵が、遠近法を取り入れて景観のパノラマ的な鳥瞰を行ったり、地形の特徴を細かく捉えることができるようになっていく。『十曲湖』はその良い例で、紅葉の十和田湖の美しさが不思議な細密描法で捉えられている」と評しています。



(十曲湖《十和田湖》)

その後は八郎潟周辺と男鹿を歩き、盆踊りや水下漁、ナマハゲなどを日記に記録しました。そして、文化8(1811)年の春からは、久保田城下郊外の金足や寺内を歩き、太平山に登りました。

『勝手の雄弓』という日記があります。久保田城下を出発して、太平の勝手神社へ行った日記です。図絵は岩見三内の奥の溪谷まで描かれています。「筑紫森」の図絵は、岩谷山頂上から筑紫森を望んだ絵です。私がよく登る山ですが、そのたびにこの風景を見て、真澄も登ったのだと思うとうれしくなります。



(筑紫森)

○地誌の作成

やがて、真澄は地誌の作成に取り組むようになり、文化11(1814)年に雄勝郡の調査を始めました。翌年に第9代藩主佐竹義和が亡くなったこともあって中断しましたが、7年を経て、地誌の作成を再開し、『雪の出羽路雄勝郡』をまとめました。文政5(1822)年末に日記など51冊を藩校明德館に献納しました。その後、地誌作成は藩命によるものになり、『雪の出羽路平鹿郡』14冊ができました。

文政9(1826)年には仙北郡の調査を始めました。しかし、文政12(1829)年7月に梅沢(旧田沢湖町)で病になり、角館で死去したということです。

真澄が書き残した地誌は、市町村史(誌)の基礎資料として今なお地域の文化に貢献しています。

○墓碑

真澄の遺体は秋田の寺内へ運ばれ、古四王神社摂社田村堂の神官である鎌田家の墓域に葬られました。

三回忌に墓碑が建立されました。墓碑には国学者の鳥屋長秋による長歌が刻まれました。

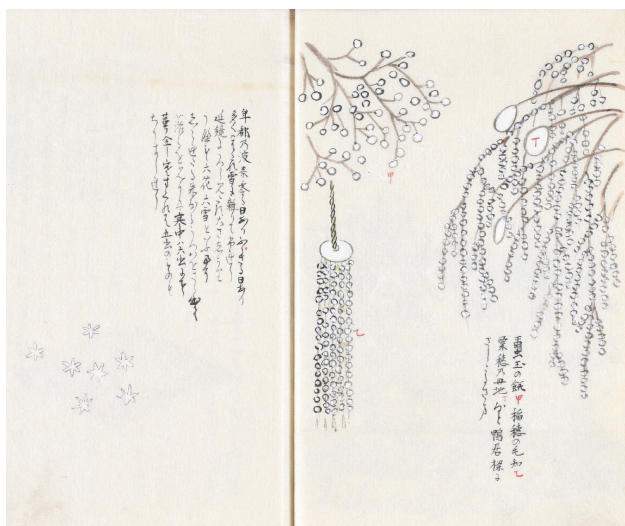
「友たちあまたして石碑立る時によみてかきつけける」と前書きして、「三河ノ渥美小国ゆ雲ばなれ ここに来をりて」から始まる長歌です。最後に死去の年月日があり、「年七十六七」で終わっています。

当時の秋田の人々は真澄に対して寛容でした。生まれ育ちに不明なところがあっても、問い詰めることなく、客人として処遇しました。死亡してから頭巾を外すことなく、手厚く葬りました。真澄は秋田に来てよかったと思ったことでしょう。

3 自然の観察

○雪の結晶

文化元（1804）年、真澄の日記『浦の笛滝』に「雪の六花」という図絵があります。北秋田市川井から能代そして八峰町の笛滝を訪れた日記です。繭玉の絵と見開きで、雪の結晶のスケッチが描かれ、観察の手法と観察の経過が文章で書かれています。朱色の器に雪を受けて、寒中から寒過ぎまで観察を続け、結晶の形の変化を発見しています。寒中は樹枝が六つ出て、萼^{がく}が完全だと書いているので、角板付き樹枝であろうか、また、寒を過ぎれば「五出」のものもあるということは、気温が上がって不完全な結晶が見られるということでしょう。



（雪の六花・まゆ玉）

雪の結晶について書かれた最も古い記録は、紀元前150年頃に『韓詩外伝』で、「雪花独六出」と記述されています。また、雪の結晶の形を描いた最古のものは、1555年に出版されたスウェーデンのオラウス・マグヌスの図であるとされています。日本における雪の結晶の研究は、茨城の古河城主であった土井利位（どいとしつら）が顕微鏡で雪を観察し、天保3（1832）年に出版した『雪華図説』が有名です。そして、越後の鈴木牧之が天保6（1835）年に出版した『北

越雪譜』の中で「雪の形」として雪の結晶図を広めました。菅江真澄はそれ以前に、雪の結晶を科学的に観察し、記録していたのです。私は、菅江真澄が日本における雪の結晶研究の先駆者であることを広く知ってもらいたいと思い、平成18（2006）年に秋田市で開催された日本雪氷学会全国大会で発表しました。

○雪形の記録

春、山に積もった雪が消えていって、次第に現れていく山肌や残雪が人々になじみ深い形を作ることがあります。これを雪形といいます。真澄の著作をよく読むと、雪形の記録があちこちに書かれています。駒ヶ岳と名の付く由来を説明し、八甲田山、岩木山については図絵で詳細に記しています。

秋田に落ち着いてからは、藤里駒ヶ岳、白神岳、太平山の雪形について記しています。藤里駒ヶ岳について『花の真寒水』で、「粕毛の嶽に雪消る時、その雪にて駒形のあらはる也」と書いています。

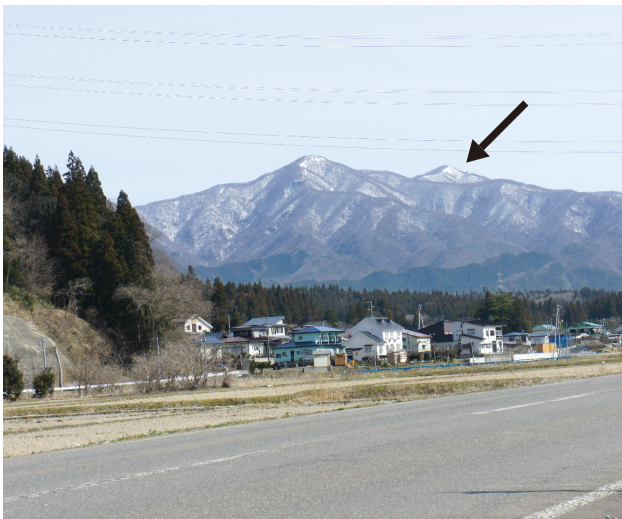
文化4（1807）年、岩館から始まる『おがらのたき』の中に、「出て遠かたをむかへば、正子（まね）にあたりて見ゆるは舟が沢の兎雪、亥方に見へたる上の字が嶽は、消へ残る雪の上文字をなせば、かれをもて白上（神）山の名におふことにや」と白神の由来を書いています。

太平山の鶴ガ岳に鶴の雪形が現れることについて、菅江真澄が太平山の登山記『月のおろちね』で「この嶺の雪もけち行ころは、鶴のすがたのあらはれける、それをもて鶴箇峯とはいふとなん」と記しています。また、富士山の布雲耕夫、栗駒山の馬形、岩木山の竜、八甲田山の蟹の鋏のことも書いています。

私は平成15（2003）年から太平山鶴ガ岳の雪形を探し始めました。観察を続けましたが分からず、2年後の4月下旬、太平地区のJA倉庫

前で、鶴ガ岳の山頂にある残雪をよく見ると鶴が見えてきました。細い^{くちばし}嘴を中岳に向けた鶴の姿です。夕日に輝く鶴を見て、一人感激に浸った瞬間でした。

これには後日談があります。菅江真澄研究会の4代目会長を務めた山田實さんが、平成元(1989)年4月6日の秋田魁新報文化欄に「太平山に舞う親子鶴」という題でスケッチ入りの寄稿をしていたのです。親鶴は私が見たものと同じで、さらに中岳に子鶴が見えるというのです。



(太平山鶴ガ岳の雪形 2024.3.28撮影)

平成24(2012)年に私が実行委員長になって「雪形ウォッチング秋田大会」を開催しました。「ホテルゆとりあ藤里」に全国から72名が集いました。山田實さんも参加してくださいました。シンポジウムで菅江真澄が見た雪形について発表しました。翌日、晴天に恵まれ、バス2台で藤里駒ヶ岳の黒馬、白神岳の「上」の字、そして太平山の鶴の雪形を観察しました。

○動植物

菅江真澄の日記を読むと随所に動物や植物が出てきます。秋田の北部を歩いた日記に多く記述されています。サルは広く分布していて、七座山や十和田湖で見えています。トキは秋田の空で普通に見られていました。

海にはハタハタが押し寄せ、ブリコを採る女性の姿を描いています。ハタハタの図絵は、雌雄のペアを博物学的手法で描いており、実に詳細です。また、スマレの図集を作ろうとしていました。サクラ、カエデについては、津軽で図絵集『桜がり紅葉がり』を作成しています。



(ハタハタ)

○地質・温泉

真澄は地質について関心があり、男鹿の海岸にある岩をたくさん描きました。特に、今では「グリンタフ」と呼ばれている白っぽい岩については、自然観察の手法で遠くから、さらに近づいて図絵に描きました。

さらに、温泉についても興味を持ち、歩いた先々の湯に浸かっています。宮城学院女子大学名誉教授の菊池勇夫氏は、会誌『菅江真澄研究』第86号で、論考「湯浴みする人々―真澄が歩いた温泉の光景」を発表しました。真澄が記録した温泉のうち、入浴した温泉を調べ上げています。

4 民俗・生業の記述

○アイヌ

真澄は津軽海峡を渡った翌年の寛政元(1789)年、渡島半島西海岸を巡って太田権現に詣でま

した。途中、アイヌの人々と交流しました。また、寛政4(1792)年の有珠山への旅では、アイヌの風習について観察し、詳細に記録しました。アイヌコタンの図絵やムックリという楽器を口に含んで奏でる様子や酒を飲み交わす図絵があります。生業の漁業では、イルカ漁、ブリ釣り、昆布刈りを描いています。

○鉱山

真澄は鉱山にも関心があり、最初に秋田へ来た翌年の天明5(1785)年4月に院内銀山を訪れました。そして再び秋田に来て、享和2(1802)年3月に藤琴川を遡って、鉛を産出する太良鉱山に行きました。その後、阿仁銅山、大葛金山を訪れています。銅を精錬するには鉛が必要でした。藤琴川が米代川に合流する二ツ井のきみまち坂付近には精錬所ができました。

○氷下漁

当時、八郎潟では様々な漁業が行われていました。真澄はそれらについて図絵と文章で記録しました。氷下の綱引き漁は『氷魚の村君』という一冊に多数の図絵が収められました。

○蝦夷百合

文化7(1810)年5月、真澄は男鹿の北浦で蝦夷百合の花を見つけて写生しました。説明書きに「蝦夷百合を浦人は『いそろ』という。エゾはこれをヌベと言って食料としている。男鹿の人は、米と混ぜて飯として、あるいは煮て食べる。味はよい」と書いてあります。

北海道大学薬学部客員教授の姉帯正樹さんが蝦夷百合を研究しており、会誌『菅江真澄研究』第100号で発表しています。「蝦夷百合の食文化は男鹿半島などで継承され、その根元がエジョロの名で現在も食されている」とし、この特異な食文化に興味を持って論文を集め、成分についても報告しています。

また、男鹿温泉郷雄山閣の山本次夫さんは、

エジョロ飯を再現し、イベントなどで食べてもらう試みを行いました。私もおいしくいただきました。



(蝦夷百合)

○ナマハゲ

文化8(1811)年1月15日、男鹿の宮沢に滞在していた真澄は、夕暮れにナマハゲが訪れた様子を日記に図絵を入れて記録しました。日記本文に「角高く、丹塗りの仮面に、海管（うみすげ）というものを黒く染めた髪を振り乱し、ケラを着て、カラカラと鳴る箱を背負って、手に小刀を持って『わあ』と言いながら入ってきた。『ナマハゲだ』。子供はびっくりして声も出さず、人にすがりつき、物の陰に逃げ隠れる。餅を与えると『ああ、こわいぞ、泣くな』などとおどすのである」と記しました。図絵の説明文ではさらに「鬼の仮面あるいは可笑(おかし)という空吹（うそぶき）の面を被る。ナマハゲは寒さに耐えず、火にあたって脛に赤い斑点がつくことをいう。その『ひかた』を鬼が来て剥ぎ取るという諺があり、鬼の姿をして出歩くナマ身剥ぎというものである」と書いています。

「男鹿のナマハゲ」は、「来訪神・仮面・仮装の神々」の一つとして、平成30(2018)年にユネスコの無形文化遺産に登録されました。



(ナマハゲ)

○軒の山吹

文化8(1811)年3月、真澄は冬を過ごした男鹿の宮沢から金足村へ来ました。餅をさしたアシと山吹の枝を軒にさす習俗が珍しく、日記に図絵を描いて記録しました。説明書きに「3月の24日ことに山吹の花を軒に差す風習がある」と書いています。現在、この風習は途絶えましたが、秋田県立博物館では、大型連休の頃、旧奈良家住宅でこの風習を再現しています。

5 おわりに

私は40年かけて菅江真澄の足跡を訪ね歩いています。遊覧記のルートのほか、生まれ故郷の三河、勉強に励んだ尾張名古屋、若い頃に登ったと書いてある富士山にも登頂しました。今は真澄が長く住んだ秋田のまち、郊外の山野を歩いています。日常の生活の中で、真澄が目にした風景を楽しんでいます。

菅江真澄の文章は平安時代の文体で書かれた擬古文で分かりづらいのですが、味わいが深く、何度読み返しても新鮮さがあります。初めての方は、現代語訳の『菅江真澄遊覧記』を読み、図絵を鑑賞することから始めるとよいでしょう。自分が関心のある風景や生業に関する器・道具などがきっと見つかり、面白いと思います。

秋田県立博物館と大館市立栗盛記念図書館には、菅江真澄の資料が所蔵されており、展示を見ることがやネットで調べることができます。また、講読会や講演会も行われています。

菅江真澄研究会では、毎月、学習会や講演会を開催しております。皆様の参加をお待ちしております。

(参考資料)

『菅江真澄遊覧記』1～5 平凡社

『菅江真澄全集』第一巻～十二巻 未来社

図録『真澄紀行』改訂版 秋田県立博物館